

# 「Psychodramatic Counseling Approach」

～ 児童臨床の個人療法への試み ～

平 原 博  
Hiroshi Hirahara

## 1 はじめに

児童期の症例は、言語表現能力が十分発達していないため、心の状態の細部をことばに置きかえることが困難なことが多い。特に、近年の強度な映像文化の影響を受けた子ども達には、この傾向が強い。このため、児童の心理療法においては、言語的アプローチのみならず、非言語的アプローチとしての描画法、箱庭療法、遊戯療法などの導入が試みられてきた。これらの多義的で、柔軟なかかわりのなかで、子どもと治療者とのあいだに良好な関係が生まれ、子ども達は表現するさまざまな感情や葛藤が整理されることで、自己治療力が賦活され、洞察へと向かうことが多い。

ところで、人の心を表現するもうひとつの方法として“動作”があるが、従来の精神・心理療法は、この“動作がもつ治療的有効性”についてはあまり論じてこなかった。カウンセリングでは、非言語的コミュニケーションとして表情・態度などを大切にはするが、言語的コミュニケーションの補助的手段としてのニュアンスが強い。

Moreno が創始した集団心理療法である Psychodrama は、最近、わが国においても精神科領域や教育・矯正の臨床の場に定着しつつあるが、その治療技法の多くは“動作”をともなった演劇的なものである。筆者は、Psychodrama の治療技法の“動作性・演劇性”に注目し、“Psychodramatic Counseling Approach” と称し、集団心理療法のみならず、言語発達が十分でない児童の個人療法のなかで、他の非言語的アプローチと同様に臨床的適応の可能性を模索してきた。

そこで、今回は児童臨床の個人療法における“Psychodramatic Counseling Approach”の導入可能な治療技法の紹介と、その有効性などについて考察したい。

## 2 Psychodramatic Counseling Approach の実際

### (1) Doll Play

Psychodrama の Mirror 法を適用した、典型的な技法が Doll Play であろう。Doll Play は、年少幼児の神経症的行動、習癖化された不適応行動などの治療に効果的である。それは、治療を人形劇に置き換え、“演劇”として観覧せることで、患児は自分の症状を“外在化”でき、症状をもつ“うしろめたさ・羞恥心”から解放されることで“気楽”になり、治療への同機づけが高まること。また、客観的・視覚的に観る行為が無意識的な症状を意識化させ、治療方法の

学習を可能にすることなどが、その主な治療メカニズムと考えられる。

当技法は、自閉症及び知的障害などの発達障害児の不適応行動の行動修正にも有効であることが報告されている(高原 2001)。

(事例1) 5歳, 男児。頭部抜毛が主訴。抜毛は1年以上続き, 前頭部はほぼ禿げている。症状が長期に渡るため, 発症原因ははっきりしない。テレビを見たり, ぼんやりしているときに無意識的に髪の毛を抜く。低年齢であるため, 遊戯療法的意味も含め Doll Play を実施した。抜毛で悩み, 頭が禿げている犬の縫ぐるみ(まるた, 写真左)とその友達犬(ぺこ, 写真右)を登場させた。“まるた”から, 相談を受けた“ぺこ”が, 髪の毛を抜かずにすむ方法をユーモラスに教え, 「髪の毛が生えるとかっこよくなる」などと演じて見せた(写真1)。3セッションの Doll Play で, 患児の髪が“復元”した(平原 1999)。



写真1 犬の縫いぐるみを用いた Doll Play

## (2) Double

### ① アンビバレンツな感情の明確化とその直面化のための複数 Double

例えば, 不登校児の「学校に行かなければならないと思うが, 行けない(行きたくない)」, 問題行動児の「人の金を盗んではいけないと思うが, 欲しい(盗みたい)」というアンビバレンツな感情が表明され, 治療的にそれらの感情を明確化し, 直面化(対決)させる必要があるときに導入する。

(事例2) 小学5年, 女児。夏休みにプールの更衣室で数回現金を窃取し, 警察に補導された。言語面接で, 治療者とある程度のラポートは形成されたが, 洞察が深まらず, 治療的な進展が見られなかった。数回目の面接で表層的ながら, 金銭窃取の欲求

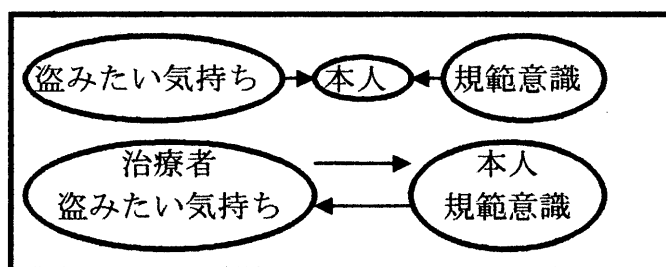


図1 アンビバレンツな気持ちの対決

とそれに対する規範意識が表明されたため, 両者を対決させることを試みた。そこで, 「盗みたい気持ち」と「ダメ, いけない」と書いた紙を貼った椅子を, 本児の両側にひとつずつ置き, 治療者が, まず, “盗みの椅子”に座り, 「ヒヒヒ・・・, しめしめ, お金があった。このお金を盗めば, おいしいお菓子が買える。ゲームもできる。楽しいことが山ほどできる。盗もう, 盗もう, 盗んでしまえ!」, 次に, “規範意識の椅子”から「ダメ! お金を盗むと, 迷惑をかける, 相手が困る。お父さん, お母さんが悲しむ。友達から笑われ, のけ者にされる・・・」などのメッセージを演劇的に伝えた。そして, 治療者が“盗みたい椅子”, 本児が“規範の椅子”に座り, 演劇的なやりとりを行った。お金が欲しく, 盗みたい気持ちを“悪

魔の誘い”のように伝える治療者に対して、本児は負けまいと、懸命に抵抗し、途中で椅子から立ち上がり、「いけないことは、いけないの！ なんて、そんなことをするの。なんて、勝手な心なの！」と“盗みたい気持ち”を激しく攻撃し、「この椅子を、やっつけよう」と、新聞紙を丸めて“叩き棒”をつくり、「悪い心は出て行け！」と、泣きながら“盗みたい椅子”を叩いた（図1）。その後、学校を遅刻するなど若干の問題行動は見られたものの、盗みなどの反社会的行動は改善された。

## ② 攻撃性などの感情の表出を促進させるための単独 Double

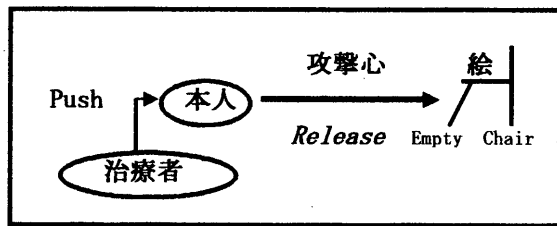


図2 感情表出のための Double

被虐待児などのトラウマワークで、虐待者に対する憎しみや攻撃心が内在しているが、言語面接では十分な表出（カタルシス）が行われないときに、感情表出の後押しをするための単独 Double（図2）。

（事例3）中3，女子。義父から長期にわたる性的虐待を受ける。言語面接では、思春期女子の性的羞恥心もあってか、抵抗が強く、多くを語ろうとしなかった。そこで、非言語的アプローチとして動的家族画（Kinetic Family Drawing）実施したところ、義父をしっかりと“包围”し、傍に“False Father”と書くなど、義父に対する否定的感情の表出が見られた。描画内容をもとに、義父に対するさらなる感情の表出を試みたが、再び寡黙な状態に陥った。言語面接では、それ以上の感情表出が困難であることが考えられたため、本児の前に椅子を置き、その椅子の上に本児が描いた絵を乗せ、治療者が本児の後に位置し、治療者が「お前が、わたしを苦しめた。どんなに、惨めで、つらかったと思うのだ・・・」など、静かな、怒り口調で絵に向かって伝えた（図2）。本児は、最初は驚いたような表情をしていたが、そのうち涙ぐみ始めた。治療者から気持ちの表明を促された本児は、初めはボソボソと小声で言っていたが、感情を込め声高に言う治療者に後押しされ、義父に対する憤り・恨みの感情を真剣な表情で明確に表明でき、停留していた感情のカタルシスが行われた。

## （3）Chair Technique と Role Reversal

### ① Empty Chair による家族関係布置図の構成とメッセージ交換による人間関係の理解

非行少年・不登校児などに対して、Empty Chair を用いて家族布置図を構成させ、Role Reversal によるメッセージ交換を行ない、家族の人間関係の把握・理解を促す。

#### ア) 家族布置図の構成

まず、治療者が、自分の家族をモデルに、治療者自身と家族成員間の人間関係や心理的距離を、椅子の置く位置の距離や向きについて言語的な説明を行いながら、家族布置図をつくって見せる。次に、対象児に、父親，母親，兄弟姉妹の順に、本人の椅子からの距離や向きについて考えさせ、そこに内在する心理的意味や問題について、治療者と話し合いをしながら

椅子を布置させる。完成後は、家族全体の椅子の位置関係を見させ (Mirror 法)、①誰の椅子が気になるか、②その気になる人と、今後どのような椅子の位置 (心理的) 関係に変化させたいか、③そのためには、自分はいかなる努力をするかなどについて話し合う (図3)。

#### イ) メッセージ交換

例えば、図3で、本人に背を向けて置かれている父親の椅子 (治療者が座っている) に対し ①「いま、お父さんに一番伝えたいこと」を考えさせ、伝えさせる (メッセージA)。②父親と Role Reversal (本児が父親の椅子に移り、治療者が本児の椅子に座る) させ、「お父さんは、あなたからのメッセージを聞いて、何と応えるでしょう」と促し、治療者が本人の椅子から伝えるメッセージAを聞いて、父親の立場から応えさせる (メッセージB)。③本人

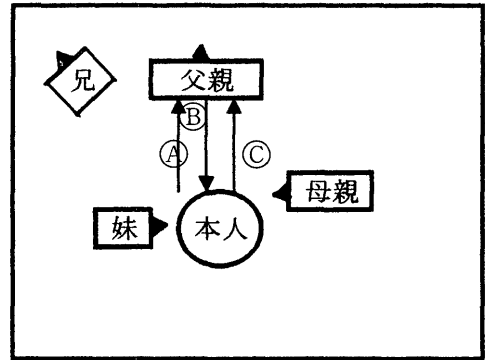


図3 家族布置図 (矢印は椅子の向き)

が自分の椅子に戻り、父親に対する最初のメッセージAを繰り返し、父親の椅子に座っている治療者が応えるメッセージBを聞いた後、父親に新たなメッセージCを伝えさせる。④家族全員に対して、同様に行う。本児が伝えるメッセージの内容が単純で表層的なときは、治療者が、カウンセリングでいう「繰り返し」を行うと内容的に深まることが多い。

(事例4) 少年鑑別所に収監されている非行少年 (約50人) に対して当技法を実施した。言語面接では、気づくことがなかった家族の人間関係の微妙で繊細な心理状態を、椅子の距離や向きの位置関係で考えさせ、Role Reversal によるメッセージ交換を通して、“相手の立場から自分がどのように見えているか” などについて理解させることができた。また、家族成員間の“想い” や自分の家族のなかでの位置づけなどに対して、情緒性をともなった深い気づき (Action Insight) をもたらすことができた (平原 2004)。

#### ② パーソナリティー再統合のための自分史

非行児や不登校児、被虐待児などの治療過程で、それぞれの発達段階における出来事とそれにかかわる情緒的体験を確認 (再体験) し、それが“いま・ある自分” にどのような影響を与えているかを振り返り、パーソナリティーの再統合を図ることを目的に導入する。



図4 自分史

#### ア) 自分史の椅子の配置と色布の選択

幼稚園 (保育園)、小学校低学年・高学年、中学校時代と4つ椅子を並べる (図4)。次に、その“年代の自分の色をイメージ”させ (例えば、幼稚園の頃は“オレンジ”など)、準備した10種類の色布から選ばせ、椅子の背もたれに掛けさせる。そして、“なぜ、その色を選

んだのか、その年代の自分はどのような生き方をしていたか、またいかなる印象的な出来事があったか”について話し合う。

#### イ) Role Reversal によるメッセージ交換

話し合いの後、その年代の椅子の2～3 m横に位置し、①現在の自分から、その年代の自分へメッセージAを送る。②当時の自分の椅子に座って、治療者が送るメッセージAを聞き、当時の自分から現在の自分へメッセージBを送り返す。③現在の自分に戻り、最初のメッセージAを伝え、治療者が応えるメッセージBを聞いた後、新たにメッセージCを送る。④同様に、各年代の自分とのメッセージ交換を行う。

(事例5) 中2, 男子。思春期挫折型の非行。言語面接では饒舌・多弁であったが、話の抽象性に逃避するという“知的化”の防衛メカニズムを生起させ、ステレオタイプな面接に陥った。言語面接に、限界を感じたため「自分史」を実施した。“色布を選択する”という行為や、メッセージ交換の表演で、もはや言語という抽象性に逃避することができず、“真なる自分”と直面せざるを得なくなったためか、新しい治療的展開を見せた。幼稚園・小学校時代の自分とのメッセージ交換のなかで、母親が“おりこうさん”になるために際限なく提示する条件を受け入れ、母親の顔色を窺いながら“自分でない自分”を演じ続けてきたこと、中学生になり、母親の要求に応じられなくなったことで軋轢が生じ、その反動として(親を困らせ、恨みを晴らすために)非行に走った自分に気づき、激しく泣いた。Psychodramatic Counseling Approachの動作性・表演性が、言語による知性化の防衛メカニズムの弱体化をもたらせたのではないかと考えられた。

#### ③ 軽度の感情表出を目的とした Monologue

思春期・青年期の対象者で、知的理解に優れ、自己の問題に対する洞察が深まり、治療的進展は見られるが、なおその症状の中核となる人物に対する“軽度の感情表出”が治療的に必要なときに用いる。

対象児の前に Empty Chair を置き(椅子は、本人が話しやすい距離と向きを確認して置く。本人の希望によっては、治療者が座ることもある)、その椅子に対象児にとって、“問題にかかわる重要な人物”が座っているとイメージさせ、「ひとりごと」のようにその人物に対する気持ちを伝えさせる。

(事例6) 短大生, 女子。高校2年時に担任から、授業中に、背中が彎曲していることを揶揄され、クラス全員から嘲笑された。以来、恥ずかしさ、惨めさと、担任に対する憎悪、恨みの感情に支配され、不登校気味になった。高校はどうにか卒業し、短大に入学したが、揶揄された身体(外見からは判別できない)のことが気になり、交友関係に自信が持てず、また、高校時代の担任に対する否定的な感情も消えない。

知的に優れるが、自我が脆弱で、繊細であった。過度な感情表出を行わせると、それを受けとめるだけの自我強度がないため、逆に、抑うつ状態に陥ることが考えられた。しかしながら、身体的コンプレックス、自己卑下からの解放を図るためには、本人の自我レベルに合っ

た方法で高校教師への攻撃心などの表出（カタルシス）に導く必要があった。そこで、本人の前方に椅子を後ろ向きに置き、そこに担任教師が座っているとイメージさせ、（前向きに座っているとイメージさせると対決的になり、本人に心理的負担を与え、感情表出が難しくなることがある）、その“背中”に“

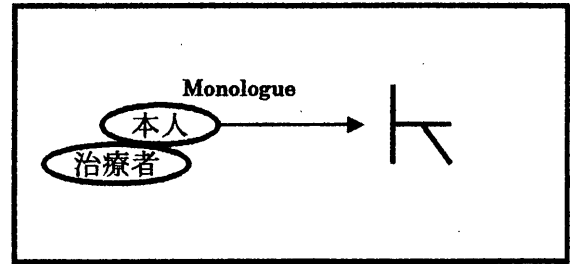


図5 感情表出の Monologue

ひとりごと”のように気持ちを伝えさせることを試みた（図5）。切々と、涙ながらに、クラスの中で揶揄され、恥ずかしく、辛かったこと、孤立無援の気持ちになり惨めだったこと、そして、自分の身体を恨めしく思ったことなどを独白した。この間、治療者は本人の斜め後ろに位置し、カウンセリングでいう「はげまし」、「明確化」、「感情の反映」などを行うことに努めた。

次の面接時には、それまでにない爽やかな表情で来談し、「胸の痞えが落ちたような感じです」との報告があった。本人の自我状態にあった感情の処理の方法として、当技法が適切であったのであろう。

#### ④ アサーション・トレーニングとして用いるお面\*

欧米では、児童のアサーション・トレーニングに用いるお面が市販されている。お面は、怒った顔、自慢な顔、不安な顔、恥じらいの顔などからできている（写真2）。社会性未熟、緘黙、引きこもり、自己主張が不得手な子ども達を対象に、それぞれのお面を用いて、内的感情の表出訓練を行っている。Argentina（1995）では、成人を対象に数多くの仮面を使った Workshop が行われていたが、「仮面を被ることで First Desire が出現しやすく、自我が脆弱な症例は、内的感情の表明が容易になる」との説明があった。

（事例7）中1，男子。自己主張ができない，仲間と話は合わせるが，一緒にいるだけで疲れ，違和感があるとの主訴。

その週の出来事や，それについて感じたことなどを報告させるかたちで面接を開始したが，言語表現が少なかった。そこで，お面を用いたアサーション・トレーニングに変更。まず，“恥”と“不安”の2つのお面を机に並べ，それらを見せ

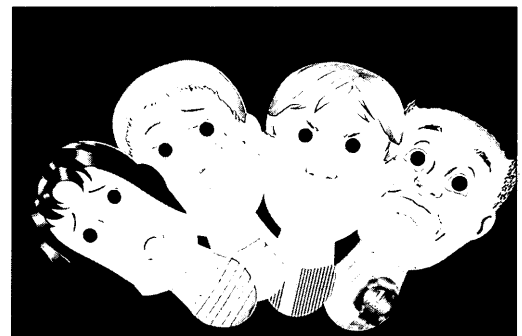


写真2 アサーション・トレーニングに用いるお面

ながら，1週間で同じような感情をもった出来事を想起させ，次にお面を被ってその内容を報告させた。数回の試行で，言語表現や感情表出が豊かになった。そこで，“恥・不安”に拮抗する感情として“怒り”を加え，“恥・不安”の後に，“怒り”を感じた出来事を想起させ，報告させた。その後，“自慢”を入れ，“恥，不安，怒り，自慢”の順に，その週に体験したそれらの出来事を報告させた。12回のトレーニングで，ある程度の自己主張が可能にな

り、クラス活動にも積極的に参加できるようになった。

(※ 本来は、“仮面”と言うべきかもしれないが、対象が児童であることから“お面”とした)

### 3 考 察

#### (1) Psychodramatic Counseling Approach の児童臨床の個人療法における治療的意味

##### ① Psychodrama 技法の発達段階における効果的な導入について

Psychodrama の代表的な治療技法は、Role Reversal (役割交換)、Double (二重自我法)、Mirror (鏡映法) である。1995年に Argentina で開催された International Association of Group Psychotherapy における Zerka Moreno の Workshop で、筆者の“Psychodrama 技法の児童臨床の個人療法への導入可能性”についての質問に対し、彼女は、子どもの知的、情緒的、対人的発達レベルから、幼少児は Mirror、児童期は Double、思春期には Role Reversal の導入の可能性を示唆した。

幼少児期はその発達レベルから、症状やその治療方法について言語的理解を促すよりも、それらを観察学習させるほうがより効果的であることが多い。Mirror 法を用いる Doll Play は、まさにモデリングとしての観察学習を提示でき、しかも遊戯療法的であるため、子ども達はあたかも人形劇や紙芝居を観るように、楽しく自分の症状や治療方法を理解し、学習できる。知的障害者や自閉症に対しても Mirror 法が有効なのは、これらの観察学習が可能なためだと考えられる。

児童期になると、Double の導入が可能になるのは、発達的に「もう一人の自分」、「自分の中のもうひとつの心」という概念理解ができるようになるためであろう。しかしながら、あくまでも「自分の心の中の、もうひとつの心」であり、Role Reversal のように「他者から見た自分」、「人から自分がどのように見えるか」という理解は、この年代では自我境界が曖昧なため困難なことが多い。Role Reversal が、自我が確立される思春期以降の症例に導入可能になるのはこのためであり、自我境界が曖昧な児童期に対しては、混乱を招くことがある。

##### ② 治療の遊戯化、症状の外在化による不安・緊張からの解放

不登校児にしろ、非行児にしろ、不適応状態にある子ども達は、“後ろめたさ”や恥・困惑などを感じていることが多い。このため、十分に準備されたことばでさえ、ときには侵襲的になり、その“後ろめたさ”を刺激することがある。特に、年少児にはこの傾向が強い。Doll Play や Double で、子ども達がもつ症状や感情の外在化を試みることは、この“後ろめたさ”からの解放を促し、症状を持つことに対する“気楽さ”を提供し、同時に治療への動機づけを高めることが考えられる。

##### ③ イメージや身体記憶化された情動を喚起し、言語的コミュニケーションを促進させる

動作は、イメージや身体記憶化された情動を喚起する。喚起・明確化された情動は言語化を

促進し、言語はその情動を吟味（認知）する。このプロセスが、また次の情動を喚起するという、いわゆる情動と認知のプロセスループを生起させる。治療者が、対象児のこの状態に機敏に対処し、カウンセリングのかかわりにもち込むと、言語的コミュニケーションが活性化し、洞察が深まることが多い。心を直接言語化する過程では、このような情動の喚起は起こりにくい。Naumburg (1995) が言及したように、描画など非言語的アプローチが、対象児の言語化を促進させるのもこのためだと考えられる。

#### ④ 知的に理解・洞察されたことが、情緒性をともなって身体記憶化される

児童のみならず、さまざまな症状において、知的な洞察・理解が深まっても、それに情緒性がともなわなければ、病態が改善しないことが多い。「人は感じたことを理解し、理解したことを感じたときに、治療的に変化し、成長する」(Yalom, 1975)。Psychodramatic Counseling Approach では、動作的表演を行うため、情緒を賦活し、情緒をともなった洞察が行われ、また洞察されたことが情緒的な身体感覚として記憶されることが多い (Action Insight)。この Action Insight は、当技法の治療メカニズムの中核となるものであり、このことが症例の早期の病態改善をもたらすものと考えられる。

#### ⑤ いわゆる“関与しながらの観察”と関係病理性の理解

児童臨床の個人面接のなかで当技法を実施すると、治療者と対象児童が、多義的な動作的・表演的かわりをもつため、言語面接的よりも、対象児の関係病理性を発見しやすい。いわゆる「関与しながらの観察」の機会をより多く与えられるためであろう。

### (2) 留意点

#### ① 子どものパーソナリティーと易傷性に配慮する

Psychodrama は、ディレクターの主導で進められ、主役の抱える心理的問題に焦点をあて、グループのなかでそれが開示される。ディレクターは、主役が提示する問題の背景に潜む“根源的な問題”について深く洞察し、同時に主役のパーソナリティーの属性などに配慮しつつ、“主役に適した（主役の心的容量の範囲内での）解決”を模索しなければならない。もしも、ディレクターが、“いま・ここで”のドラマ（治療）の遂行に追われ、主役の属性を鑑みず、主役に“不一致”を感じさせながらドラマを展開させたり、主役のもつ心的容量を超え、問題解決に不必要な内的状態の吐露を行わせたりすると、治療的にならず、逆に主役を傷つけ、ドラマ後に精神的不安定さをもたらすこともある。自我の発達が未熟な子ども達は、この易傷性はさらに強い。このため、児童臨床の個人治療のなかで、Psychodramatic Counseling Approach を効果的に機能させるためには、いま子どもが何を望み、何が治療的に必要とされ、どのような方法のなかで、子どもが自分自身をよく表現できるかなどの治療プロセスと対象児の属性を十分考慮したうえで、タイムリーに導入されなければならない。他の心理療法とは違い、動作と表演を“治療的武器”にする当技法は、対象児の感情を揺さぶり、強度な心理的变化をもた



らすことが多い。このことは、対象児にとって有益に機能しなければ、逆に強度な心理的な副作用をもたらすことにもなる。そして、他の非言語的アプローチなどともよく共存し、当技法だけが治療全体の流れのなかで突出しないように心掛けることが大切である。

## ② 枠づけのなかで自由な表現を促し、受け入れ、共感する

サイコドラマは広義的には遊戯療法である。サイコドラマティストは、原則に忠実でありながらも、柔軟で、即興的で、ユーモアのセンスをもち、かつ創造的であることが大切である。いわゆる“遊び心”がなければならない。子ども達は、治療者のこのような姿勢に触れることで、主体性を獲得・回復し、自由で自発的な自己表現ができるようになる。そして、表現したものが、治療者に受け入れられ、共感されることで、自尊感情を回復するなど治療的に成長する。治療者は、“指示的で、枠づけされたサイコドラマ技法”を用いながらも、子ども達をいかに主体的で自由な自己表現に導くことができるか、また子ども達が表現したものを、枠づけされた環境のなかで、いかに豊かに受容・共感することができるかという、パラドキシカルなテーマが問われるのである。

## 5 おわりに

今夏（2004年）、Oxfordで開催された British Psychodrama Association の Celia Scanlon の「Psychodrama in the Counseling Room」のワークショップに参加した。筆者は児童臨床であるが、彼女は、Psychodramatic Counseling Approach を成人の個人療法への適用を試みようとしていた。また、それに参加していたロシアの女性が、「難しい患者（Difficult Patient）のカウンセリングはステレオタイプに陥ってしまう。突破口を見つけたくてこのワークショップに参加した」と言っていたが、彼女も、また言語面接では治療困難な成人の個人療法への Psychodramatic Counseling Approach の導入の可能性を模索しているように思われた。筆者は、世界的なこれらの動向に対して勇気づけられ、心強く感じた。

「A Person-centred Approach to Psychodrama」を主催した Edana Davis は、従来のディレクター主導とは異なる主役主導のサイコドラマを展開し、「車を運転するのは主役。ディレクターは助手席で、運転手に、道路状況を伝える役目。即ち、サイコドラマのなかで、主役は、自らの力で自己実現を果たすべき。（監督）>（主役）、あるいは（監督）<（主役）ではなく、（監督）～（主役）（＝ではない）であるべき」と述べた。治療観とその背景にある人間観が異なり、しかも言語面接を主体にした個人療法の Rogers と、動作・表演を用いる集団心理療法の Moreno とを融合させようとする試みに感動を覚えた。筆者が、集団心理療法のサイコドラマの技法を、児童臨床の個人療法へ導入を試みて10数年になるが、サイコドラマが他の心理療法と融合され、さらにその技法の有効性が示される時代の到来を予感できた。

## 引用文献・参考文献

- Kellermann P.F. 「精神療法としてのサイコドラマ」(増野 肇 訳 金剛出版 1998)
- 近藤 喬一監修 「運動表現療法」 星和書店 1998
- 高原 朗子 「あるアスペルガー症候群の青年に対する心理劇」 臨床心理学研究 第1巻第6号 p789~800  
金剛出版 2001
- 武井 麻子 「グループとうい方法」 医学書院 2002
- 土屋 明美 「アクション・カウンセリング 共に状況を創り・育てるカウンセリング」 日本心理劇協会  
2001
- 傅田 健三 「こどもの遊びと心の治療 精神療法における非言語的アプローチ」 金剛出版 1998
- 平原 博 「抜毛症のDoll Playによる治療例」 心理劇研究 第22巻第1号 p50~55 1992
- 平原 博 「集団と個人の成長の2層的機能を有するウォーミング・アップ10技法(その1)」 心理劇研究  
第27巻第1号 p38~48 2003
- 平原 博 「少年鑑別所におけるサイコドラマの試み エンプティチェアを用いた家族布置図について」  
西日本心理劇学会 第29回抄録集 p19 2004
- Naumburg M. 「力動志向性芸術療法」 中井 久夫 訳 金剛出版 1996
- Morton Kissen 編 「集団精神療法の理論」 佐治 守夫 訳 誠信書房 1996
- Moreno J. L. 「Psychodrama First Volume」 Beacon House. 1975
- Moreno J. L. 「Psychodrama Second Volume」 Beacon House. 1985
- 増野 肇 「心理劇のすすめ方」 金剛出版 1990
- 村瀬嘉代子 「子どもと大人の心の架け橋 心理療法の原則と過程」 金剛出版 1995
- Yalom, I. D. The Theory and Practice of Group Psychotherapy. New York: Basic Books. 1975

(2004年12月2日 受理)